

My Thesis(私の学位論文)

医歯薬学研究部 口腔顎顔面補綴学分野 市川哲雄

市川哲雄

「S 発音時の舌と下顎の動態に関する研究」

日本補綴歯科学会雑誌 Vol. 31 (1987) No. 3 p.740-752 蔵本 1 階雑誌書庫(東)に所蔵あり

私は徳島大学歯学部の1期生として卒業し、新設の大学院1期生として歯科補綴学第一講座故松本直之教授の教室に入局した。ここで研究したいという思いはあまりなく、田舎での開業に有利な臨床教室という意識での選択であった。教室もできたてのほやほやで、博士の学位を持っていたのは教授と准教授のみで、今に思うと学問、研究をするという環境ではなかった。学位研究のテーマは、「義歯と発音」であった。教授からはこの研究テーマはうちの教室では既にレールが敷かれた研究だから安心したまえといわれたが、私の目はよいはずだがレールは何処にも見あたらなかった(笑)。ものごとには常にいい面と悪い面があり、私の場合には最初から歯車ではなく、ある意味 Principal Investigator として働けたわけだが、言い換えれば、働かざるを得なかったわけで、研究スキルアップの方法から外に探さなければならなかった。

口腔生理学の故高田充教授には直接的な指導を受けなかったが、学問とはどういうものかを感じさせていただいた。当時の東京大学医学部音声研究施設や岡崎の生理学研究所のセミナーに連れて行っていただいた。歯科補綴学第二講座の坂東教授には、当時では最先端であった ME 技術に基づく計測方法を教えていただいた。ときに上がしっかりしないと、下は育つものだということを言われる方がいるが、あれは間違いであって、やはり、いいもの、本物を見ないとダメだと思っている。ここまで書くと、恩師の松本教授はダメだと思われるかもしれないが、臨床能力は超一流であり、教室運営の戦略も間違っておらず、その面でのいいものを見させていただき、勉強をさせていただいた。

私の学位論文のタイトルは「S 発音時の舌と下顎の動態に関する研究」で、義歯の発音検査で重要な S 音の生成について、動的パラトグラムとマンディブラー・キネジオグラフから検討した論文であった。そのときは一生懸命書いたつもりであるが、タイトルからも今思えば恥ずかしいものあり、仮説はなく、現象をこねくり回しただけの論文構成である。当時の我々の学問領域と教室の完成度の低さを如実に示していると思う。学位論文の国際誌への投稿は思いもよらないことで、しばらくたった後の教室の課題と言うレベルであった。

ただ、この研究を通して、デジタル技術を歯科補綴学の発音検査、評価に導入したことは新規性が高く、また後に続く音声研究における Analysis by synthesis (合成による分析)のシステムや反射型光センサによる舌運動計測システムを独自に開発したことを含め、当時の世界の研究スキルのレベルからいって、何ら恥じることのないレベルまでには到達していたと思っている。それは、大学院修了3年後の留学先の研究手法を見てもこの程度かと感じられたことから言えた。しかし、研究でも最も大事な Philosophy の構築の重要性を感じるのはその後であり、ある意味悠長な研究人生であったと振り返る次第である。